

第25回 福島ダイアログ

原子力災害後に「共に生きる」

不確実な時代における連帯のための信頼

～個人と集団の関係

Living Together After the Nuclear Accident

**Relationship of Trust for Solidarity
among Individuals and Communities
in Uncertain Times**

窪田亜矢 Aya KUBOTA/ 東北大学
ayakubota@tohoku.ac.jp

原子力災害後に「共に生きる」

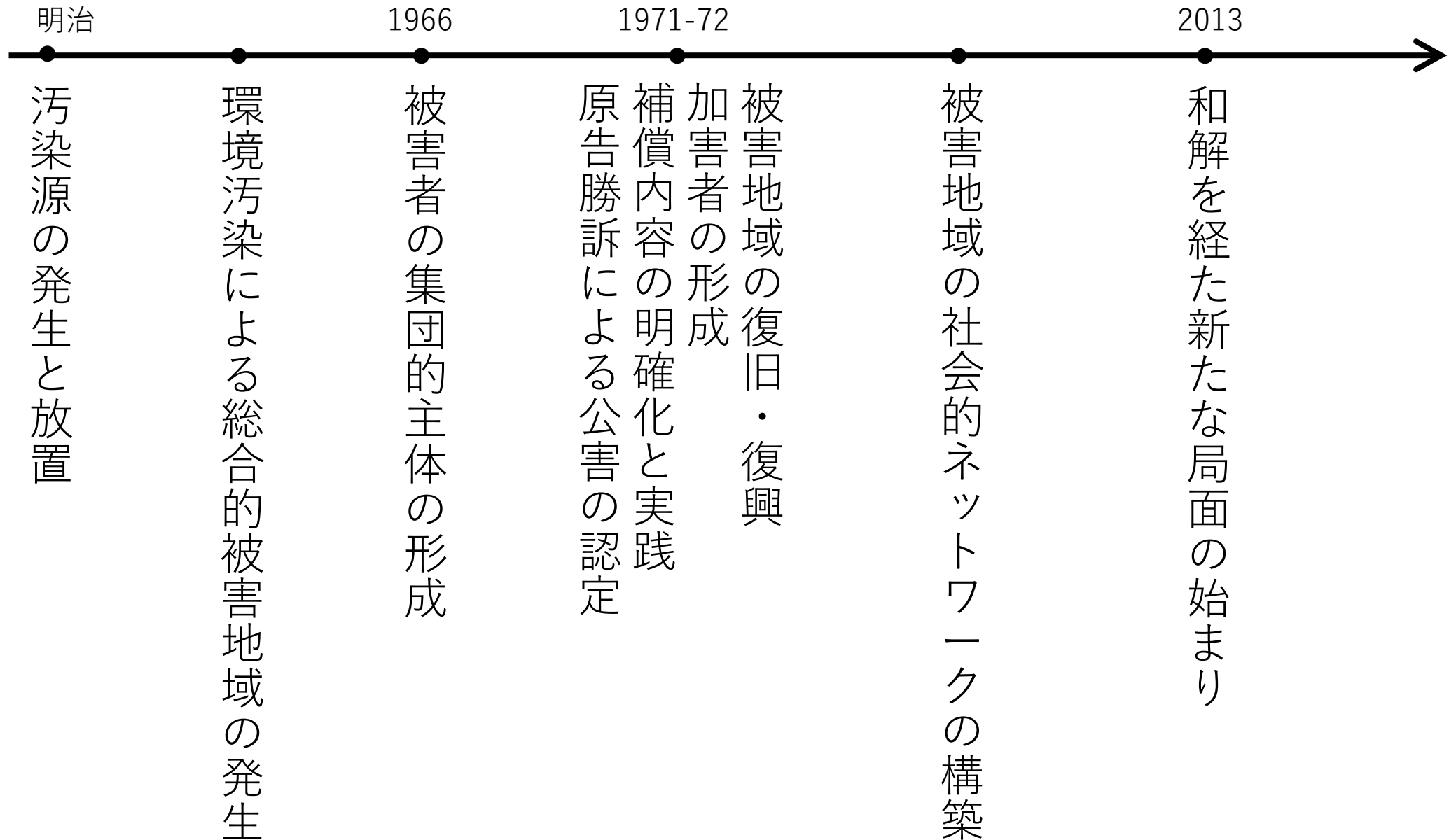
1. イタイイタイ病被害地域における公害対応
2. 福島原発事故被害地域の現状とこれまで
3. 原子力災害後に「共に生きる」

1. イタイイタイ病被害地域における公害対応

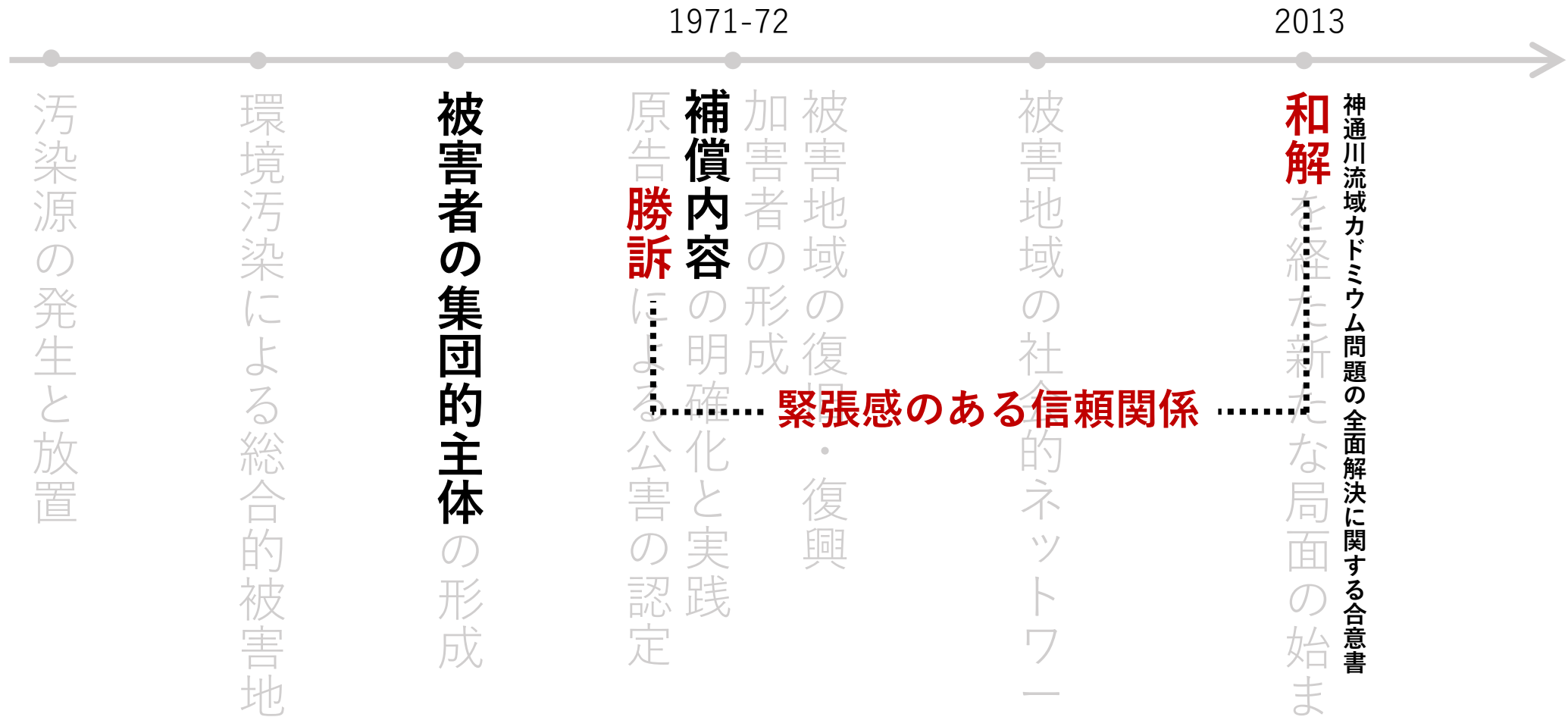
被害者と加害者の間の

緊張感のある信頼関係

1. イタイイタイ病被害地域における公害対応



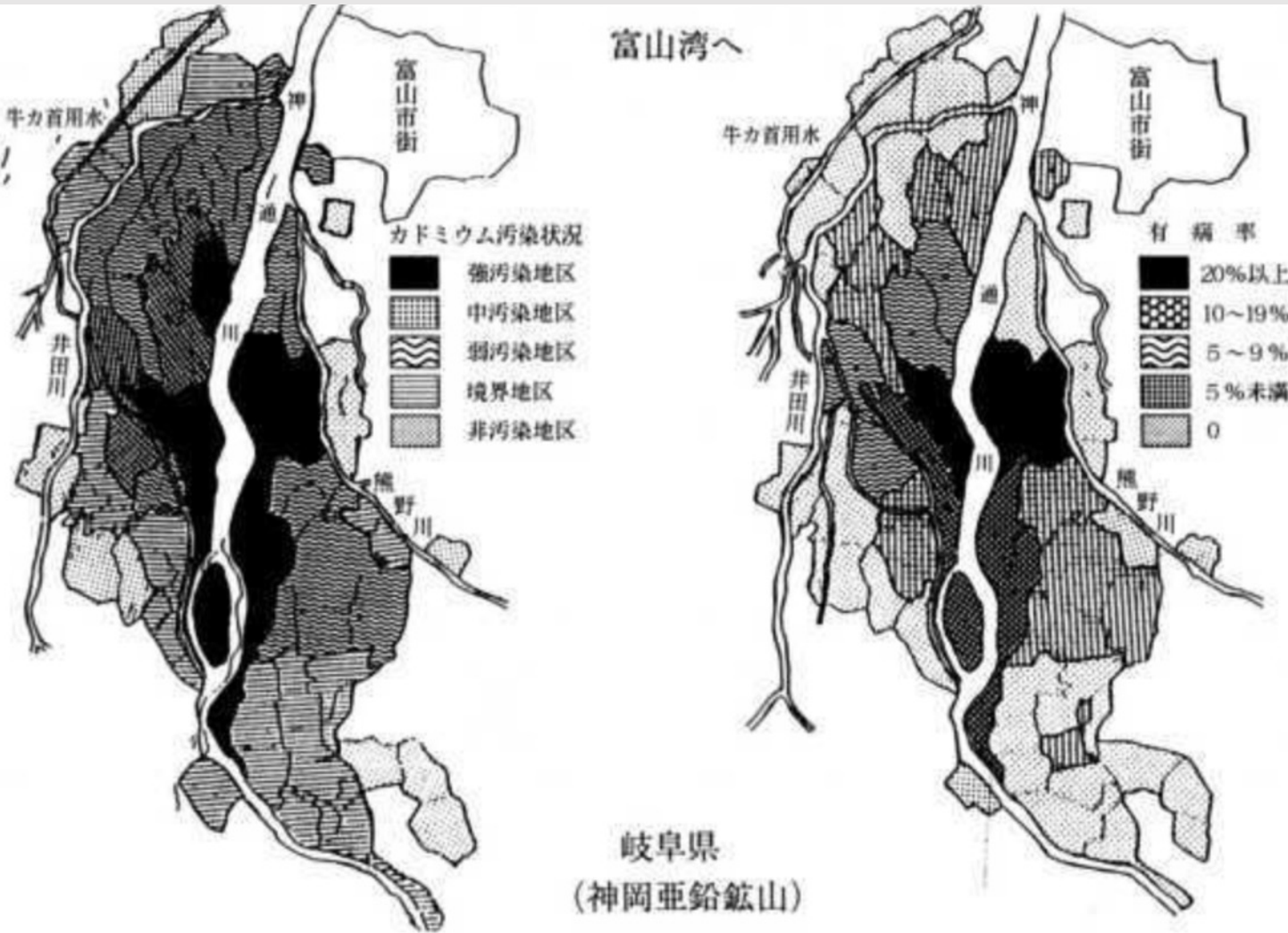
1. イタイイタイ病被害地域における公害対応



- ① 健康被害への賠償
- ② 汚染の除染と地域再生
- ③ 公害の再発防止

1. イタイイタイ病被害地域における公害対応

①健康被害への賠償



汚染物質の拡散状態と患者の地域的分布の関係

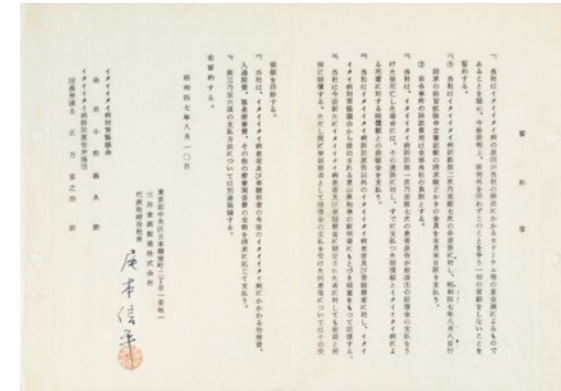
1967 富山県による医療救済

1972 勝訴

公害に係る健康被害の救済に関する特別措置法による**患者認定**

イ病の賠償に関する誓約書

「今後新たにイ病患者及び要観察者の今後のイ病にかかわる治療費、入通院費、温泉療養費、その他の療養関係費の全額を請求に応じて支払う」



2013 神通川流域カドミウム問題の全面解決に関する合意書
神通川流域住民健康管理支援制度

国が公害病として認めていないカドミウムによる腎臓への影響を被る人を対象に、加害企業が一時金を支払う制度 (見込500-600人→137人2016年)

カドミウム程度別地域区分

イタイイタイ病患者有症率

1. イタイイタイ病被害地域における公害対応

②汚染の除染と地域再生

農用地の土壌の汚染防止等に関する法律
1970のもとで、農用地復元対策事業開始

汚染地域調査 3,130ha
食品衛生法基準 0.4ppm

1号地：玄米中カドミウム濃度1.0ppm以上
2号地：1周辺で汚染米発生のおそれあり

土壌汚染対策地域および
産米流通対策地域の図

農用地土壌汚染対策地域
1,500.6 ha

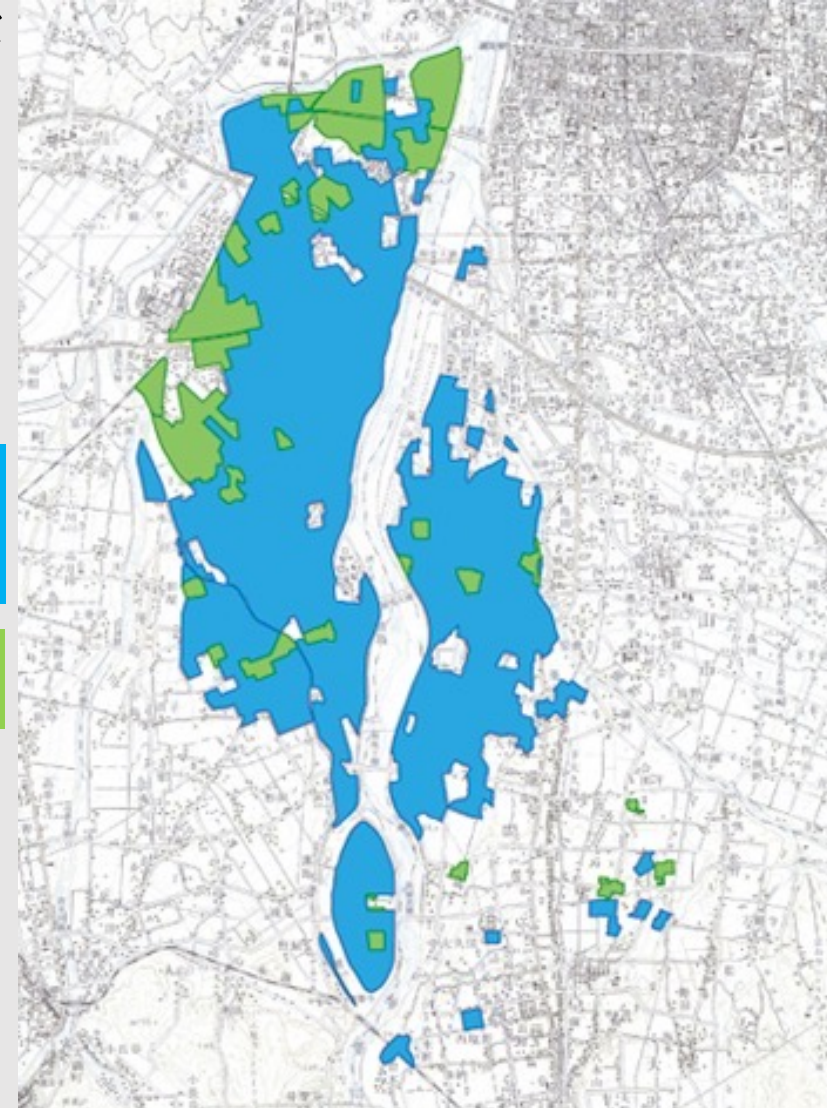
3号地：0.4～1.0ppmの汚染米

産米流通対策地域
185.6 ha

作付けができない箇所は加害企業が補償
2,3号地の収穫米は国が買い取り非食用

- ・復元工事計画 → 客土基本、2012年3月終了
- ・安全性確認調査計画
- ・土地利用計画

玄米カドミウム濃度
復元前 0.99 ppm平均
復元後 0.08 ppm平均



出典：富山県厚生部イタイイタイ病資料館ウェブサイト

1. イタイイタイ病被害地域における公害対応

②汚染の除染と地域再生



明確な将来像の共有
「米作以外考えられない」

神岡鉱山は遠隔地

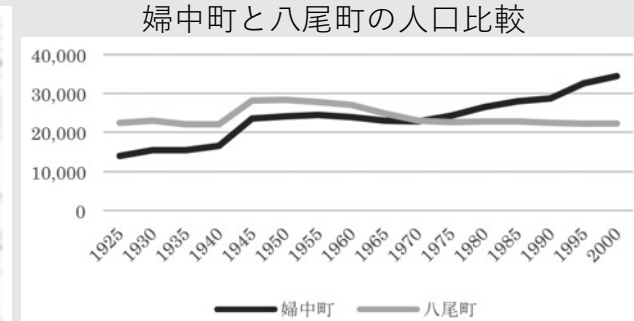
行政による丁寧な説明等
住民と行政の間に信頼関係あり
住民間の結束（被害者が経産婦）

被団協会長
(当時)高木勲寛氏

土地利用計画：インフラ整備、農地を二分類

- 1) 継続農地 → 用排水路改良事業等
- 2) 宅地化農地 624ha (富山駅から5-10km)
→ 住宅地、公共・商業施設
産業展示施設、運動公園

道路整備された宅地 + 水路整備された田んぼ



▲改良した用排水路

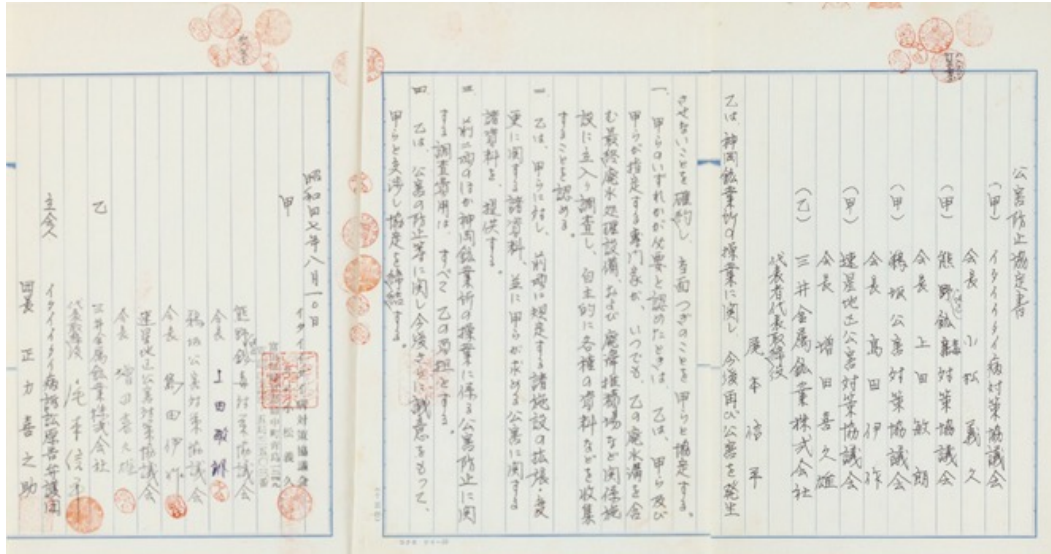


▲とやま健康パーク

1. イタイイタイ病被害地域における公害対応

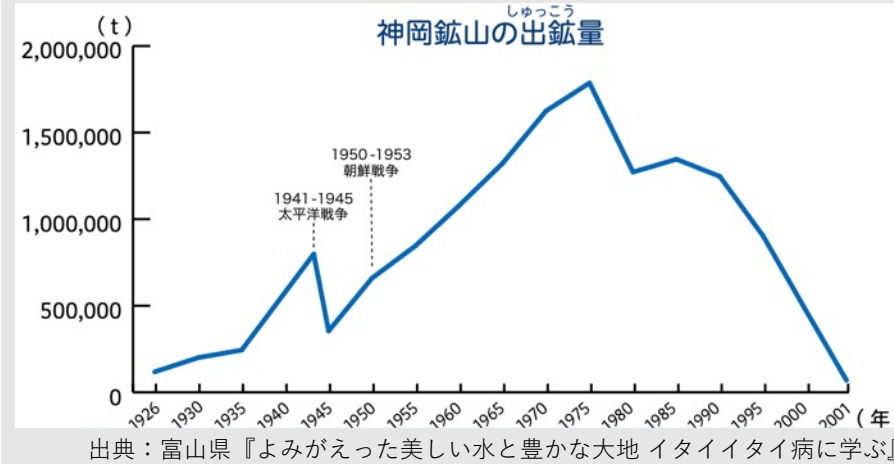
③公害の再発防止

1972 勝訴、公害防止協定



「乙(三井金属工業株式会社)は、神岡鉱業所の操業に関し、今後再び公害を発生させないことを確約し〜」
 「甲ら及び甲らが指定する専門家が、いつでも、乙の〜関係施設に立入り調査し、自主的に各種の資料などを収集することを認める」
 「〜調査費用は、すべて乙の負担とする」

- 1972 最初の立入り調査
 - 1970年代後半 出鉱量ピーク
 - 2001 採掘全面終了
 - 2021 50回目の立入り調査
- 輸入鉱石や廃バッテリーから亜鉛や鉛を生成



被団協が立ち入り調査 岐阜・神岡鉱業、豪雨対策求める

暮らし・学び・医療 | 富山
 毎日新聞 | 2017/10/1 地方版 | 有料記事 529文字



神岡鉱業の担当者(右端)から説明を受ける被団協の参加者=岐阜県飛騨市で、古川宗憲撮影

富山市の神通川流域で発生した国内初の公害病・イタイイタイ病の被害者団体「神通川流域カドミウム被害団体連絡協議会(被団協)」は30日、原因企業の神岡鉱業(旧三井金属鉱業、岐阜県飛騨市)を立ち入り調査した。被団協側は近年全国で多発している豪雨対策の状況を質問し、更なる対策を求めた。

立ち入り調査は公害防止協定に基づき、1972年から実施しており、今回で46回目。被団協側からは住民、科学者、弁護士、議員など6人が参加し、…

1. イタイイタイ病被害地域における公害対応

緊張感のある信頼関係 → 次世代に向けた継承

汚染源の発生と放置

環境汚染による総合的被害地域の発生

被害者の集団的主体の形成

被害地域の復旧・復興
加害者の形成
補償内容の明確化と実践
原告勝訴による公害の認定

被害地域の社会的ネットワークの構築

和解を経た新たな

- ・神通川清流環境賞
- ・患者救済事業
- ・発生源対策



公害資料館ネットワーク



- ① 健康被害への賠償
- ② 汚染の除染と地域再生
- ③ 公害の再発防止

非常に先駆的な事例

→ 当たり前前の公害への対応

1. イタイイタイ病被害地域における公害対応

2. 福島原発事故被害地域の現状とこれまで

- ① 健康被害への賠償
- ② 汚染の除染と地域再生
- ③ 公害の再発防止

3. 原子力災害後に「共に生きる」

2. 福島原発事故被害地域の現状とこれまで

そもそも明確な勝訴に至っていない

→被害者の集団的主体は個別に形成、もともと存在していたところも

→「加害者」形成には至っていない

→補償内容が明確になっていない

①**健康被害への賠償**：放射性物質の影響は判別しにくい
認定されるのか不安→**係争中**

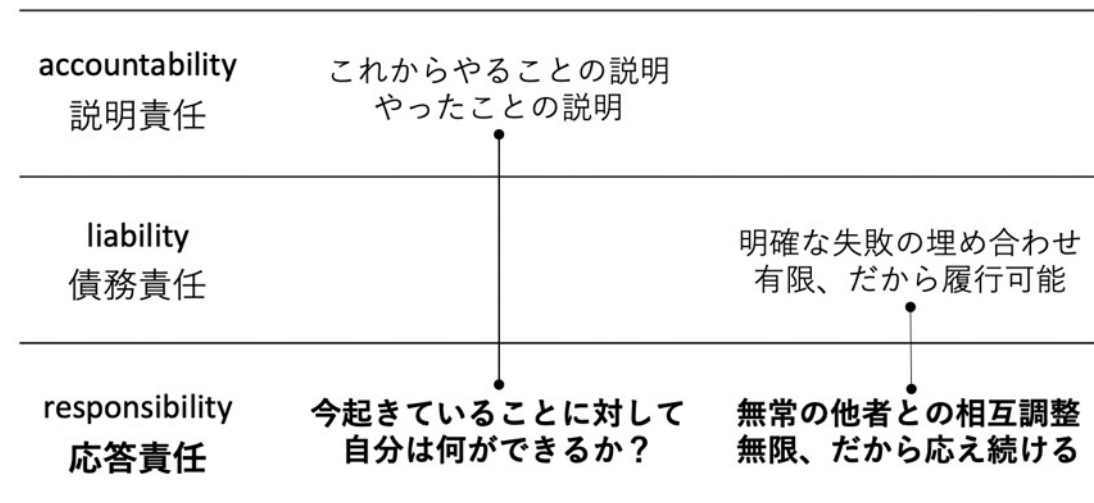
②**汚染の除染と地域再生**：膨大に拡散した放射性物質
地域激変、産業喪失、人口激減
→**地域や集落それぞれの方法必要**

③**公害の再発防止**：壊れた原子炉、他地域展開→**未収束**

2. 福島原発事故被害地域の現状とこれまで

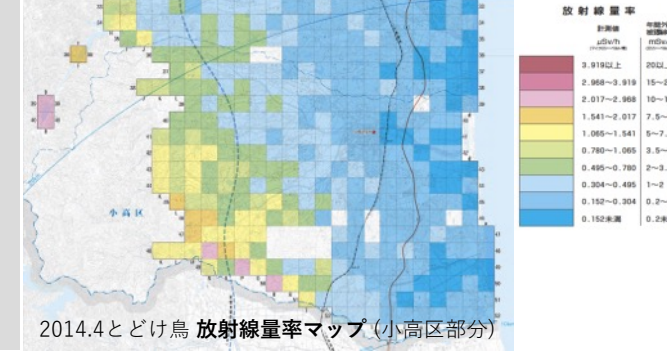
- 広域的な被害の超長期的継続、未知
→原子力災害は終わったともいえない？
- 連続する命令や強制（行政/専門家, 法律/科学的知見）
→当初からの信頼の欠如
- 望んでいない選択（選びたくない選択肢, 拒否できず）
→被害の連鎖

当事者が軽視され続けている
**当事者 = 現場において
応答している個人や共同体**



南相馬市小高区で学んだこと

1889	小高村, 金房村, 福浦村
1954	小高町
2006	南相馬市 (原町市・鹿島町と合併)
2010	12,543 人
2016/7/12	避難指示解除
2017.3	1,488 / 9,079 人
2023.3	3,812 / 6,436 人 居住/住民登録



南相馬市
Minami-Soma City

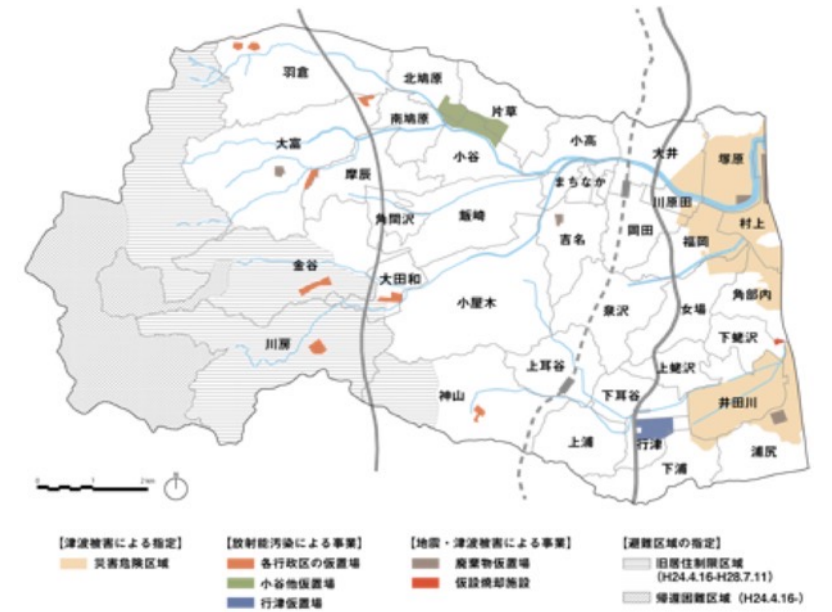
小高区
Location of Odaka Ward



0 5 10 20 km

南相馬市小高区
91.95km²
12,546人(2010)

福島第一原発



20km圏内：全域避難 2016年7月解除
Within 20km: Area evacuation lifted in July 2016

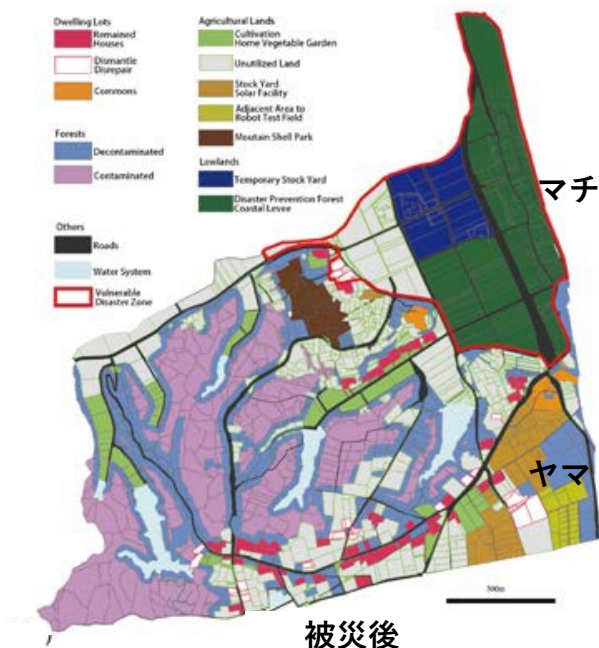
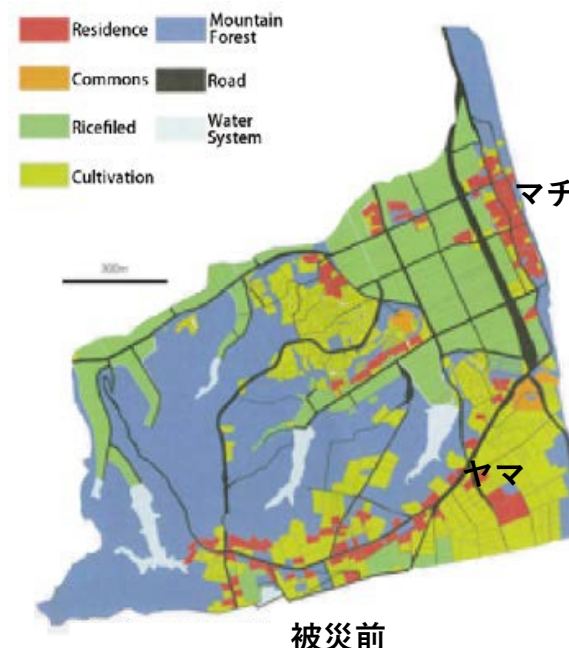
20-30km圏：屋内待避
20-30km area: shelter indoors

南相馬市 > 小高区 > 集落で状況は異なる



浦尻行政区での実践

窪田/李美沙/萩原/益邑 2020 原発複合被災の土地利用・管理への影響把握と集落単位による対応に関する研究-避難指示解除を経た福島県南相馬市小高区浦尻行政区を対象として、建築学会計画系論文集, 85(773), 1491-1501



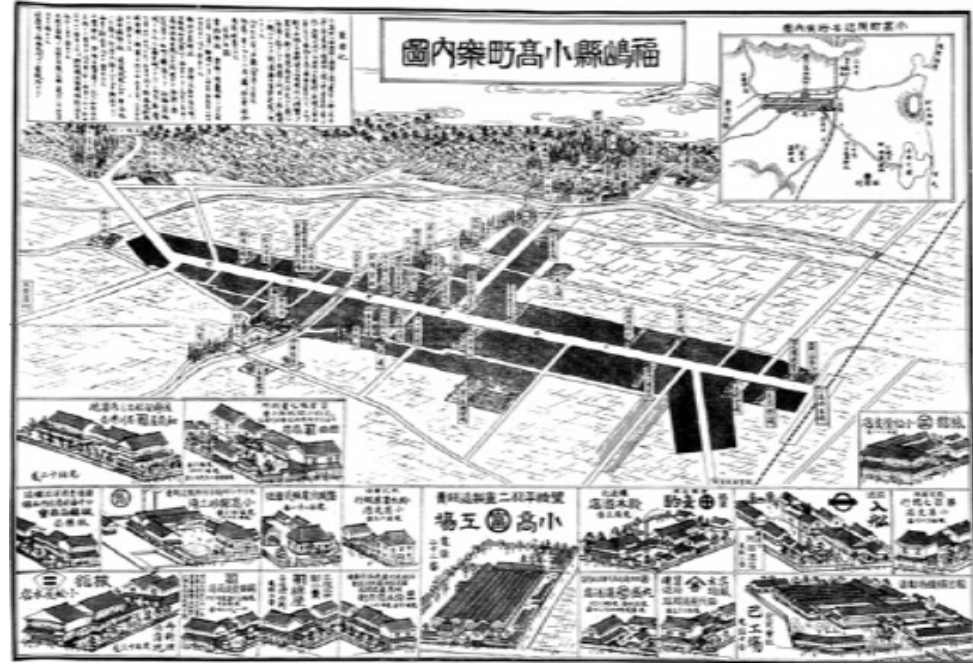
人は減るけど土地は減らない

- 行政区全員で問題共有
- 実態把握 (非帰還者の宅地と畑)
浦尻宅地農地山林道路等愛護会の立ち上げ
- 自分たちでやれることはやる **責任観**

浦尻行政区の土地利用変化

小高のまちなかでの実践の特徴

奥澤理恵子/窪田亜矢 2020 原発被災を経たまちなかにおける交流空間の果たした役割-被災から8年の福島県南相馬市小高区を対象に、日本都市計画学会論文集, 55(3) 872-879

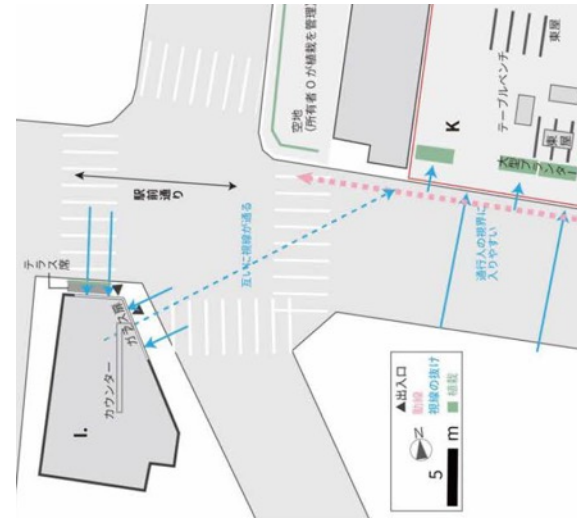


交流の場 喫茶店, 本屋, 理髪店,,

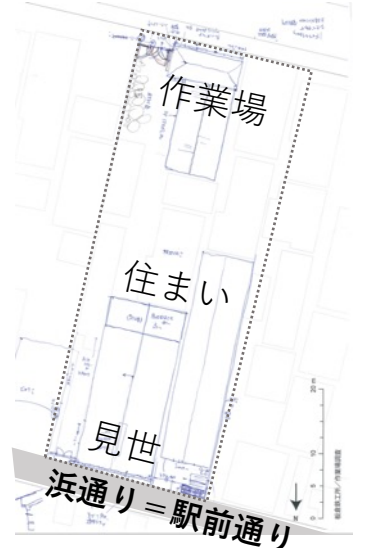


まちなか菜園

- 見世を支える空間構造



浜街道 = 駅前通り沿いの見世空間

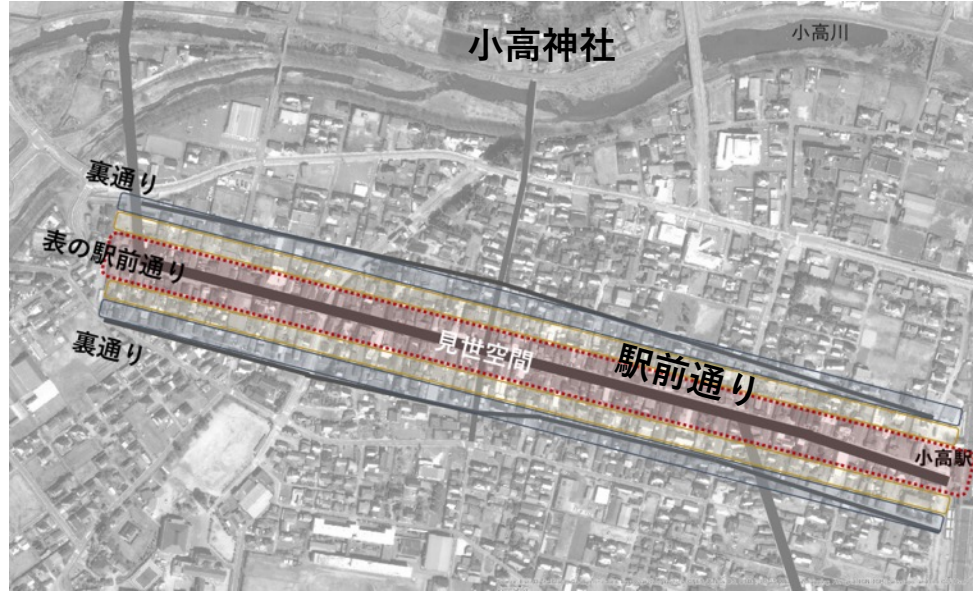


敷地利用の不文律

- 状況に応じて変化する利用や手入れ



広畑裕子さん：おだかぶらっとほーむ→小高工房

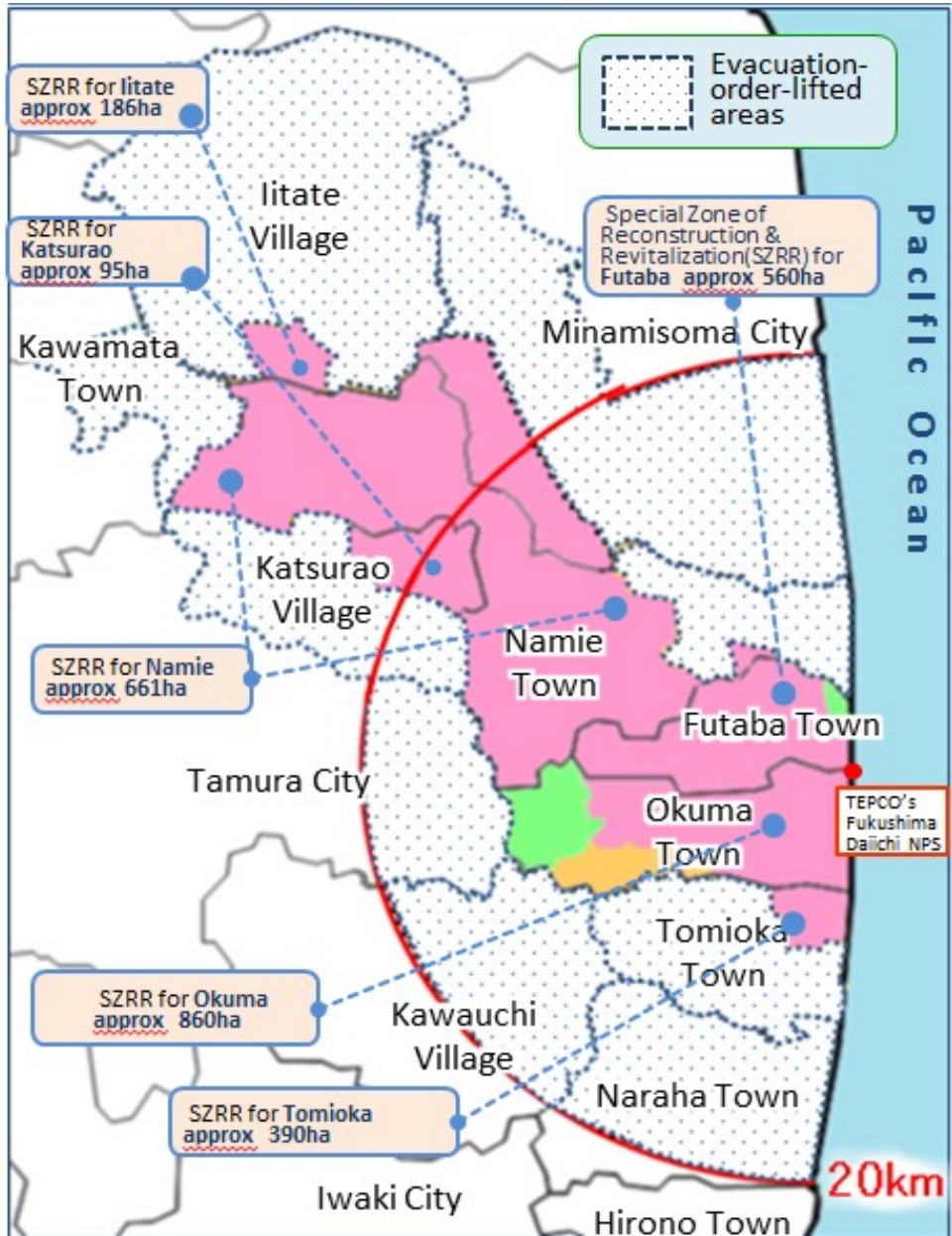


行政区やボランティアによる草刈り

計画を超えた自然(じねん)的実践の創発の連続
気配～交流まで、様々な交わりの場となるまちなか

1. イタイイタイ病被害地域における公害対応
2. 福島原発事故被害地域の現状とこれまで
- 3. 原子力災害後に「共に生きる」**

3. 原子力災害後に「共に生きる」



非当事者の強い介入

連続する命令や強制

望んでいない選択

不確実な時代に生じがち

当事者の変容

災害前までの仲間は変化、物理的離隔

自分では変えられない条件の中で、

しかし自分で決めなくてはならない状況

今までの暮らしを失う

何かすると非当事者から批判される

二地点で暮らす、測定、訴訟、...

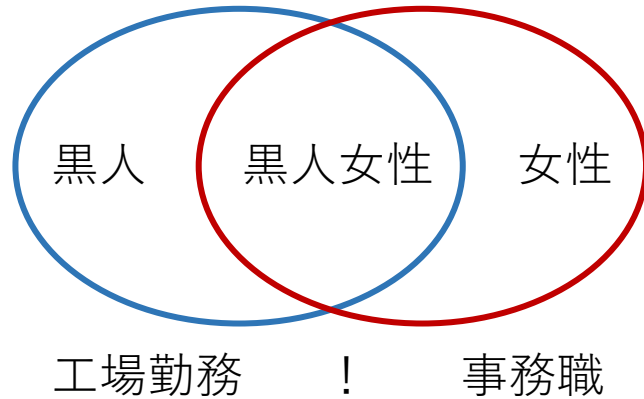
→個人や共同体（集落や活動団体）の分断

3. 原子力災害後に「共に生きる」

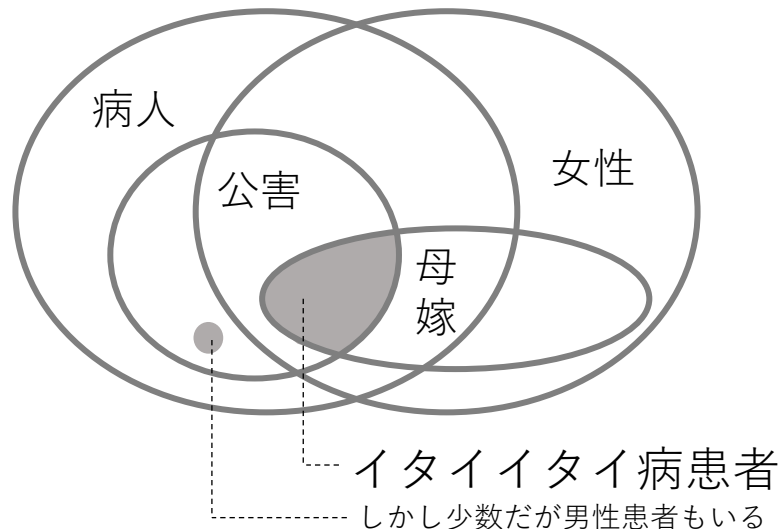
分断→インターセクショナルリティ = 交差性

複合差別、重複差別

クレンショー1989



人種やジェンダーなどの複数の社会的、政治的アイデンティティの組み合わせにより、人々が経験する不公平さや有利さを識別するために使われる枠組み (Wikiより)
特に、差別を理解する概念として使われてきた



小さなカテゴリーによって分断されるのではなく

- **交差性**という理解
- 応答し続ける態度への**信頼**
- 応答の**方向の共有**

連帯できる

